

賞味期限が切れてます

— 金峯山寺との思い出 —

金峯山寺



いつもお盆になると思い出す人がいる。

お会いしたことはないが、低い声でボソボソと短い言い方をする人であった。

その頃私は、原因不明の病気による痛みやその他種々の問題で精神的苦痛におしづがされていた。

こんなに誠実に一生懸命働いてきたのに、この苦しみは一体何に起因しているんだろう？

水中深く頭ごとふんずけられながらも、必死で息を吸おうとする如く、私はいろんな本を手当たり次第読みあさっていた。

眠る前の5〜6分… 食事中の1〜2時間… 病院の待合室で… 待ち合せの車の中で… トイレの中で…

そのほとんどが前世とか霊界についての科学的事例であり、物理学等により証明された記録書である。(近年、量子力学により、霊界があることが証明されたのである)

そんなある日、ある人から奈良県吉野山の日本の霊山、金峯山寺に、「ご先祖様の回向をお願いしたらいかがですか？」とすすめられた。

その人の説によると、「この世の苦しみは霊界の御先祖様の苦しみでもある」と言う。

そう言えば我家は何代にもわたる古い農家であったが、三代という長きにわたって住む家もなくなる程に没落していったのである。

没落してゆく家と生きた祖父、父、弟の戦いとあせりと嘆きと、絶望と貧と愛憎のうず中を、私も戦い、怒り、耐え、さげすまれ、小さくなって生きぬいて来たのであった。

結婚して数十年後に訪れた実家は、廃屋となった田の字型の畳の上を

丸い大きな葉を茂らせた太い「つた」が鎌首を持ちあげた大蛇のようにゆうゆうと踊るようにはい回っていた。

その凄惨さに思わず息をのんだ。

ふすまも障子もなくなった四つの部屋は、寝たきりの祖母を囲んで、病氣ばかりしていた私と、頭のよい弟と、おかつぱ頭の妹二人が、40ワットの電灯の下、布団をくつつけあつて寝ていたことを、思い起こすことも出来ないほど、寒々として、ちりちりに縮んだうす茶色の「つた」の枯葉が、ふきだまりとなって、部屋の隅に寄せ集められていた。

そして野犬か、野ネズミにひきちぎられたにちがいない布団の綿が、小さな固まりとなって八帖間をあちこちにちらばっていた。

それを見ても私は何の感慨も湧かなかつた。

この家は私に安らぎも幸せも与えてはくれなかつた。

否、この家に住む誰をも幸せにしなかつた。

「ああ、余りにもわがままで傲慢で、余りにも愛がなかつたから、やなごさがなかつたから、こつなつたのだ」と、私はその没落の原因を痛い程知っていた。

が、無知で無力な私には崩れゆく石垣をどうすることもできなかつた。

唯、泥となって一緒にすり落ちて行つたのである。

金峯山寺 ― 古く飛鳥時代から聖地として知られ、人々を迷いや苦しみから助け、悟りの世界へ導くのがその起りとされ、修験道の中心的な道場として多くの修行僧、宗教者が宗派を越えて入山修行している。

その精神文化は日本人の心の原点として ― ユネスコの世界文化遺産にも登録されている。

大峯山一〇〇〇日回峯行、8年間にわたつて一〇〇〇〇日を懸ける金峯山千日回峯行など、多くの僧侶、修験者が日々厳しい修行を続けている。

日本国の中心に位置するこの寺……。

そして日本を代表する霊山。

ああその霊界には、私の大好きな祖母がいる。

崩壊してゆく家の暗がりの片隅で、病める一生を終えた祖母がいる。

私が死んだら霊界一幸せにしてあげると何百万回も誓い続けたのに
気配にすら出てきてくれない祖母がいる。

私は金峯山寺のご回向(供養)申込シートに、限りある御先祖達の名を書き連らねて
毎月その成仏を願ひ続けた。

根深い因襲の、貧しい農村社会の中で、働きづくめに働き死んでいった沢山の御先祖様達よ…。

ひとりで涙がこぼれていた。

“ありがとうございます…”

懐かしいような、親しいような、泣きたいような――

だまって頭を下げたい思いのまま、私は毎月一人一人の御先祖様の名を書き連ねていったのである。

そんなある日、

私の血肉でもあるこの回向料がどのような道筋を通って霊界の祖母のもとに届くのだろうか？と知りたくなった。

どうしても祖母に会いたかったのである。

あんなに苦しい生涯だったんだもの、せめて霊界で幸せにならなかつたら…

私はどうしたらいいんだろう？

私は何をしてくれるのだろうか？

どんな事をしてでも祖母を幸せにしてあげたかった。

いてもたってもいられず私は金峯山寺に電話をした。

はぎれのよい、聡明な電話口の女性に

“すみません。皆様方の中で一番偉い…一番の責任者の方が変わっていただけじゃないでしょうか？”と問いかけた。

しばらくしてから電話口に出て下さった低い声の男の方に向かって、私は懸命に訴えた。

“私は金峯山寺様に御先祖様の成仏を願って、多少ではありますが、毎月血肉とも思える回向料をお送りしております。

でもその回向が、このようにして霊界へ届けられるのか知りません。

本当に申し訳ないのですが、私のこの必死の願いを込めた回向用紙はどの様に扱われているか、教えていただけないでしょうか？”

低い声があった。

“それはみな、缶の中に入れてお堂の下に納めてあります。”

「えっ……」

「だって金峯山寺ともなれば…毎日、全国から何千枚もの回向用紙が送られて来ると思うのですが…千年以上にもわたって…毎日毎日缶々の中に詰め込んで…お堂の下に運んでゆくんですか？」

(突如、目の前に七〇×八〇cmのステンール缶に詰め込まれた回向用紙が海の如く、見渡す限り並べられている光景が目に見えたのである)

“あの…金峯山寺のお堂の下って…そんなに広いですか…?”

“そうです” 低い声が静かに言った。

そんな事 — だって… — 一〇〇〇年以上も経っているのよ。

紙だっていつかは腐ってしまうのよ…。

でも私はその声に対して何も言えなかった。

そして思い切って尋ねたのである。

「あの…申し訳ないのですが、お名前を教えてくださいませんか…?’

その人は

「大林です」と言った。

「大林さん。 お願いがあります。 私はこれから回向申込の封筒に、

大林様と大書して郵送致しますので、これからは、私の回向用紙は、全国から送られた回向用紙の一番上に置いて御祈願して下さい。

御僧侶様のご祈願の音が一番よく浸み込んで、霊界へ届きますように」

「……………わかりました…」

静かなその声を、私は瞬時、信ずることができた。

そして晴れ晴れと満ち足りた思いで、電話を切ったのである。

その後、短い手紙とともに大林様宛の回向申込用紙を郵送させていただいたのであるが、ふと“私は少しわがままな事をしているのではないだろうか？”との思いにさいなまればじめた。

次の月、申込の封筒に飴を二袋同封した。

それは、東日本大震災のあと、余りにも美味しい飴だったので、次にくる震災に備えて段ボール一箱分、買っておいたものである。

ある日の午後、電話が鳴った。

「ハイ。麗加の家です」

私の声は明るくはずんでいた。

澄んだその声は二十代の様だと言われていた。

「…シヨウミキゲンガキレテマス…」
低い声があった。

「ハッ…？」私のトーンが落ちた。

「あ…う…何でしょうか…？」

「…シヨウミキゲンガキレテマス…」

「ハ……？」

今度はその人がゆっくりと、一言一言を区切るように言った。

「ア・メ」

「ハ……？」

突然私ははじけるように笑い出した。

「あめ？ ああ… あめにも賞味期限があるんですか？」

「あります」おこそかな声が言った。

突然、体の奥底から、楽しさや嬉しさが一緒くたになってふき上げてきた。まるで火口から噴き出す水蒸気や溶岩のように。

笑いが止まらなかった。

その人は黙っていた。

私は笑いながらあやまった。

その飴は今まで一番美味しかったこと。

次の震災に備えて大事に買っておいたものであり、大林様が初めて差し上げた方であること

今までいっばいわがまま言ってきたお詫びであり
飴に賞味期限があるなんてしらなかった事など…

何も語らない電話口に向かって、勝手に話し始めた。

何だか楽しくて仕方なかったのである。

そしてつい調子にのって、言ってしまったのだ。

「大林さんは、おいくつですか？」

何年のお生まれですか？」

「昭和〇〇年です。」

「あつ…それなら…私達、死ぬ時は一緒ですね？」

「……………」

「あつ！あつ！…」私はまたしてもやってしまった!!

電話口は無言のままだった。

男女の平均寿命を推しての言葉だったのであるが…

長い沈黙のあと――大林様が何て言って下さったか全く記憶がない。

まだこみ上げる楽しさに酔いながら、私は悪びれもせず

一方的に、いつもより一寸長いおしゃべりをし続けたのであった。

時には、不動産という仕事柄、土地によって地縛霊がいる所があるんですか？とか

成仏しない霊がいてもそのまま地鎮祭してしまうんですか？とか

聞いたこともあったが、

どう答えて下さったか覚えていない。

もしかしたら、確信的なことはおつしやらなかったのかもしれないし、

私もそれ以上深く聞くことしなかったのかも知れない。

いつも大林様の低い声を聞いた丈で幸せな気持ちになり、

一寸だけ、好き放題なことを言いつて受話器を置いていたからである。

そしていつしか――大林様あてに回向の申込みをすることもなくなっていくた…。

あの絶望の日々から――何年が経っているのだろうか…？

私は今、誰にも頼ろうと思わないし

頼れないことも知った。

大林様、私がこんなに大人になれたのは、

こんなに楽らくになれたのは…もしかしたら大林様が何年にもわたって

私の回向用紙を一番上に置いて御祈願し続けて下さったからかもしれないね。

御先祖様へ、誰よりも早く御僧侶様の御祈願が届き続けたからかもしれないね。

今年も暑い暑い夏がやって参りました。

大林様は今日も吉野山全山を吹き抜けてきた山の霊気いっぱいのお
さわやかな風の中で、お仕事ななっている事をお察し致します。

いつの日か、霊界の入口でばったりお会いすることがないとも限りませんが…。

その時は、幸せなお顔をお見せ下さいませう――

いつかわからないその日の為に、毎日を精一杯、心やさしく生きてゆきたいと思っております。

この世での宿題と気付きたる日より

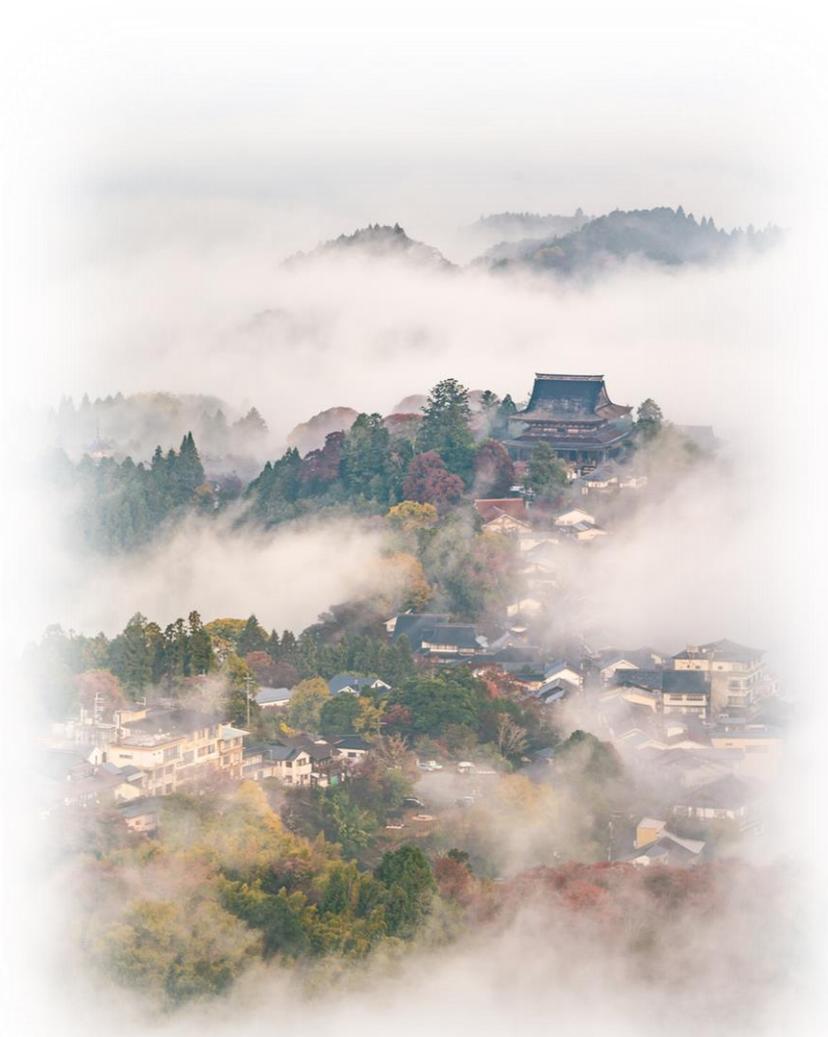
悲しみの原因^{もと}を追うを止めたり

— 歌集「遠き麦笛」より —

大林様、どうかお元気で過ごして下さいませ。
今まで長い間本当にお世話になりました。
本当に有難うございました。

令和五年七月末日

渡邊麗加



吉野山と金峯山寺